

金城公主の入蔵について(中)

佐藤長

五

次に金城公主の入蔵が政治的、軍事的方面に及ぼした影響について述べてゆこう。既述のごとく公主の入蔵には左(饒)衛大將軍、河源軍使の楊矩が付添となつて同行したが、吐蕃は彼に厚く賄賂を贈り、河西九曲の地を公主湯沐の邑とすることを運動させた。朝廷は楊矩の上表によつてこれを許可したが、兩唐書吐蕃伝にはこの事情について次のごとく記している。

睿宗即位……時楊矩為鄯州都督、吐蕃遣使厚遊之、因請河西九曲之地、以為金城公主湯沐之所、矩遂奏与之(旧伝)。

公主至吐蕃、自築城以居、押矩鄯州都督、吐蕃外雖和而陰銜怒、即厚餉矩、請河西九曲、為公主湯沐、矩表与其地(新伝)。

公主の出発した年のうちに中宗の逝去、睿宗の嗣立があったから楊矩が帰国したときは確に睿宗代であつて、ここに彼が鄯州都督となつてゐるのは恐らく入蔵の経緯と功勞に酬いられたためであらう^①。

河西九曲の分譲された時期については新唐書中宗本紀に、

〔景龍四年〕三月、以河源九曲予吐蕃。

とあり、同年二月に公主が中宗と別離してから間もなくこのことが決定されたことを言っている。この本紀の記載を信ずれば、河西九曲の分与は公主、楊矩などの入蔵以前のこととしか考えられないが果してそうであらうか。通鑑は景雲元年(七一〇)十二月の条にこのことを記し、冊府元龜卷九九八外臣部發詐の条には玄宗の先天中(七一二)のこととしてこのことを記す。そしてすべての書が鄯州都督の楊矩に賄賂を贈つたと書しているので、楊矩が吐蕃より歸り鄯州都督となつてからこの話は具体化したのであり、冊府元龜の「先天中」とする記載を信するのが最も適當な見解と言ふべきではないかと思う。本紀の記載は「公主湯沐の邑」と言う言葉にひかれて、誤つて公主の出発直後にその割讓の時期を繰上げて記したものであらう。

ところで河西九曲の位置であるが新旧唐書吐蕃伝、地理志ともにこれに關しては何等の記載がなく、通鑑の景雲元年の条、楊炬が九曲を与えた経緯を述べたところに、

九曲者去積石軍三百里、水甘草良、宜畜牧、蓋即漢大小榆谷之地、吐蕃置洪濟、大漢門等城、以守之。

と胡三省の注があるだけである。そこでこれを手がかりとし漢代の大小榆谷の地を水経注で見ると、その卷二河水の条、水経の本文に、

a. 又東入塞、過敦煌酒泉張掖郡南。
とあり、その注に、

b. 河水屈而東北流、逕析支之地、是為河曲矣。

c. 河水自河曲又東、逕西海郡南。

d. 河水又東、逕允川而歷大榆小榆谷北。

とあり、続いて本文には、

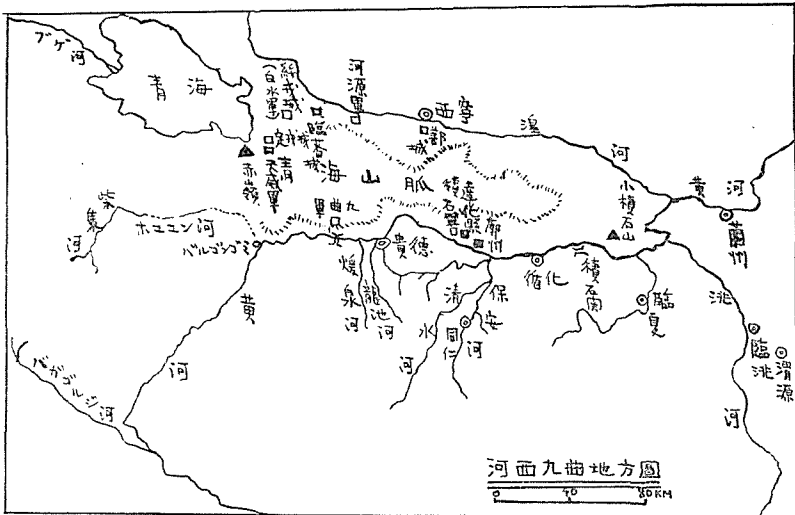
e. 又東過隴西河関原北、洮水從東南來流注之。

とある。e文中の西海郡についてはその文に続いて、

漢平帝時、王莽秉政、欲耀威德以服遠方、飄羌猷西海之地、置西海郡、而築五鼎焉、周海亭燧相望、莽篡政紛亂、郡亦棄廢。

とあって、王莽のとき青海の周辺におかれた郡であることが分る。

り文の「河水屈而東北流」は、北緯三五度の北で黄河がバガゴルジを合せて東北流するのを指し、c文では更にそれがバルゴンゴミ附近より東流するのを言っているのであろう。さすればd文の允川は



恐らく柴集河の下流のホユン河を指しているものであろう。d文とe文を併せ考えると大小楡谷はこの允川より河関県の間であり、黄河の南に存在することが明かとなる。そこで河関県の所在であるが、e文に示される通り洮水が黄河に注ぐ地点より西にあり、大体今の循化県に比定されるのではないかと思う。バルゴンゴミと循化県の間で黄河の南に当り、前述の胡注に述べるような「水甘草良、宜畜牧」の所と言えば、東は保安河流域から西は岷泉河流域までの地帯でなければならず、この地は小河川が数多北走し、現在でも青海付近で可耕可牧の最高の肥沃地として知られる所である。

ところで九曲の地をこのような大小楡谷の位置に求めると、胡注に、

九曲者去積石軍三百里。

とあるのは距離の上で甚だ矛盾することになるのではないか。何となれば積石軍より三百里の距離とすれば如何にしても河西九曲はバルゴンゴミの以西即ち河曲方面に求めなければならなくなるからである。胡氏がこの注を作成した材料は恐らく冊府元龜卷九九二外臣部備禦五、開元二年十月の条の、

頃者、吐蕃以河為界、神龍年中降公主吐蕃、遂過河築城、置獨山九曲兩軍、去積石三百里、又於河上造橋、吐蕃今既叛、此橋既因毀折、橋既見毀、城自然拔。

なる一文ではないかと思う。この文は開元二年、唐、吐蕃の軍が洮

河流域に戦い、吐蕃が敗北したとき、宰相盧懷慎、姚崇などが述べた意見で、これによれば九曲の軍が積石より三百里であるとは言っていない。河西九曲が積石より三百里の距離にあるとは言っていない。そこでこの積石の位置であるが、それが山名であるか軍名であるかによって場所は全く異った地に分れるであろう。

山名とすれば杜佑の通典卷一七四、州郡四古雍州下風俗の条に、「積石山」今西平郡龍支界山是也。

とあるのがこの山で、更に詳しくは李吉甫の元和郡縣圖志卷三九枹罕県の条に、

積石山一名唐述山、今名小積石山、在縣西北七十里、按河出積石山、在西南羌中、注於蒲昌海、潛行地下、出於積石、為中國河、故今人目彼山為大積石、此山為小積石。

とあるのがこれに当る。この場合積石山は小積石山の謂であるから、枹罕県即ち現在の甘肅省臨夏県の西北七十里、黄河に沿うて存在する積石関より東の地点に比定しなければならぬ。顧祖禹は讀史方輿紀要卷五二陝西一積石の条に、大積石山について、

又河州衛（臨夏県）西北七十里有積石山、兩山如削、黄河中流、西臨蕃界、俗謂之小積石山一名唐述山。

と小積石山を述べ、又同書卷六〇河州積石関の条に、

東去積石山五十里。

と述べているが、明かに通典、元和郡縣圖志の記述に従ったもので

ある。又軍名とすれば新唐書卷四〇地理志鄜州達化县の条に、

西有積石軍、本薛辺鎮、儀鳳二年爲軍。

とあり、達化县は元和鄜州志卷三九鄜州の条に、

達化县 下、東至州三十里。

とある故に、鄜州の西三十里に達化县が存在し、その西に積石軍が存在したことになる。鄜州は讀史方輿紀要卷六四西寧鎮鄜州城によれば、

鎮南百八十里……今廢、州城南去黄河、不及一里。

とあるから現在の貴徳よりかなり東へ寄つて黄河沿岸に存在したものであろう。要するに開元二年までには小積石山も積石軍も存在したのであるが、この際冊府元龜の「積石」は小積石山を指すものと考へたいのである。

そこで積石山より三百里の距離をとると九曲軍は九曲の地の西寄りの燧泉河の河口近くに置かれ、橋はその付近にかけられたことになつて、この位置は後にかげられた洪濟橋の位置よりしても妥当な地点であることになる。とすると胡氏が「積石軍より三百里」としたのは冊府元龜などの「積石より三百里」なる文を勿卒にとつて解釈したもので全くの誤りと考へなければならぬ。何となれば積石軍とすれば燧泉河口までの距離は到底三百里などの遠路ではあり得なくなるからである。冊府元龜のこの文に対応する新伝の文は甚だ

曖昧な記録で、中に、

〔吐蕃〕橋河築城、置独山九曲二軍、距積石二百里。

と述べて積石からの距離を二百里としている。二百里は三百里の誤かも考へられるが、積石軍からの距離とすれば、この記載は当らずと雖も遠からざるものと考へねばならないであらう。

ところで胡氏は「九曲は積石軍を去ること三百里」と言っているが、この九曲も冊府元龜などの場合は前に触れたごとく九曲軍の意味であつて、河西九曲そのものを指しているのではない。九曲軍は勿論河西九曲の地帯にはあつたがその位置は燧泉河の河口付近であるから地帯そのものから言つて西寄りであり、河西九曲の中心にあつたとは考へがたい。胡氏の注は河西九曲の位置を比定する一つの手がかりを提供はするが、それを全面的に承認することはこの場合には到底できない。胡氏はなお「吐蕃は洪濟、大莫門などの城を置いてこれを守つた」と言うが、これは後のことで複雑な論証を必要とし当面の問題には関係ないからここでは取り上げないことにする。

河西九曲をほぼ保安、燧泉両河流域の地帯とすることは状況判断の上からもでき得ることである。その証拠の第一はそれまでの唐蕃の会戦の地域についてであるが、南北朝より貞觀の初期まではこの地帯には鮮卑系の吐谷渾が国を建てていた。貞觀十二年に吐谷渾は吐蕃に討たれて青海の北に逃れ、咸亨三年には遠く靈州安樂州の地

に遷った(新唐書列伝一四六上吐谷渾の条、通鑑)。この間行われた重要な戦鬪の場所は大非川(ブゲ河)、赤水(柴集河)など、いずれも青海の西辺より南辺にかけての地帯で、燉泉河の河口までも及んでいない。従つて当然次に吐蕃の進出する道は燉泉河流域地方より東の牧草地帯でなければならなくなる。

証拠の第二は当時の唐の前線が所在した地である。東から見ると洮州には莫門軍が置かれ、その北方の大夏河口近くには河州があり、この西百八十里には鎮西軍が置かれていた(新唐書地理志)。河州より西方三百九十里黄河北辺には廓州があり(元和郡県図志卷二九廓州の条)、その管下に広威、達化、米川の三県があり、そのうちの達化県の西には積石軍があった。積石軍はもと勝辺鎮と言つたが、儀鳳三年に軍となつたことは前に述べたごとくである。この廓州の北方青海山脈を越えて遼河のほとりに儀鳳三年に設置された、鄯州都督府下の鄯城があり、その西百二十里の地点に土鑿山に河源軍が存在した(前掲書鄯州の条)。それより西六十里には臨蕃城があり、その西六十里には白水軍のいる緩戎城があった。又西南六十里には定戎城があり、南方澗を隔てて七里の地に天威軍があったが、これが石堡城と呼ばれ(新唐書地理志鄯州の条)唐一代を通じて攻守所を変えた枢要の地である。この城より西二十里の地点に赤嶺があり、開元二十一年に分界碑の立てられた所でその西方一帯は吐蕃の領域

となつてゐる。そこで洮州より河州、廓州、赤嶺を結ぶ線を引き、これを唐の最前線であるとすると問題の地域はこれに隣接はしていても未だ何等軍事的設備を施されない黄河以南河曲までの地帯であることが分る。

もはやこれ以上河西九曲の範圍について論述する必要があるまい。問題はこの土地の有用性である。漢代に大小榆谷と呼ばれた頃にもこの地は肥沃を以て鳴り、種種のチベット系部族の住む地域であつた。後漢書卷一一七西羌伝を見ると陰麗相曹鳳の上言として、

建武以来、西戎数犯法、常徙烧当种起、所以然者、以其居大小榆谷、土地肥美、又近塞内诸种、易以为非、难以攻伐、南得鍾存、以广其衆、北阻大河、因以为固、又有西海鱼塩之利、缘山洪水、以广畜、故能彊大、常雄诸种、恃其楨勇、招诱羌胡、今者襄困、党援瓌沮、親属離叛、余勝兵者、不過数百、逃亡楼寘、遣依羗羌、臣愚以为、宜及此时、建復西海郡县、规固二楨、广设屯田、隔塞羌胡交阕之路、

とあつてこの地帯の經濟上、軍事上の重要性を遺憾なく物語つてゐる。公主入藏の際の化粧料とされたこの地は吐蕃の時代になつてもその重要性は一向減じなかつた。新旧伝にはそれぞれ、

吐蕃は既に九曲を得たが、その土地は肥沃で軍隊を駐屯し牧畜を行うのに適していた。又唐の國境に近接しており、これより吐蕃は再び叛し兵を率いて入寇することをほじめた(新伝)。

九曲は水と草の質がよく、牧畜に非常に適しており(その地は)

唐に近接している。これより吐蕃はますます發展し入寇しやすく
なつた(旧伝)。

とあつて続いて開元二年の吐蕃の大軍の臨洮軍への侵入を伝えている。もとより年若くして降嫁した金城公主は自己の化粧料がこのよ
うな母国への侵入の契点にされるなどということは夢にも思つてい
なかつたに相違ない。入蔵後の公主がこの地帯をめぐつての事件の
類案に如何程心情を傷めたかは想像に余りある。しかし事實は公主
の心中とは逆に次々と苛烈な兩國の戦闘がこの地を媒介として多年
にわたり継続するのである。

六

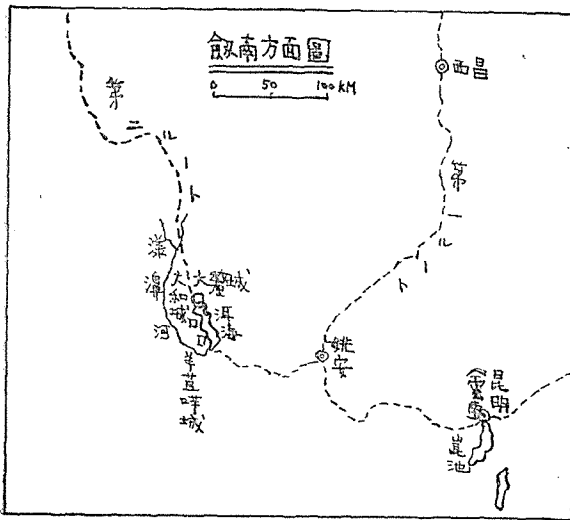
吐蕃におけるチデツクツエンの支配は天宝十四載(七五五)安祿
山の乱の勃発の頃まで続くが、公主入蔵後このときまでは唐蕃の間
には凡そ四回の戦闘が行われた。もとよりこれらの戦闘の間には平
和な時期もあったが、その期間も割合に短く、記録の上では殆ど交
戦の連続の状態となつてゐる。當時は吐蕃は青海、東西トルキスタ
ン、バミール地方などで唐の勢力範囲と接触しており、戦闘の舞台
は必ずしも河西九曲と限つてはいない。しかし間接的には河西九曲
における兩國の勢力伸張が原因していることは否むことができない
事實である。以下中国史料を中心に金城公主在世中の三回の戦闘と、
それにつれての唐蕃交渉の変化を明かにし、併せて公主の動静を断

片的ではあるが髮着させてゆこう。

さて第一回の戦闘は開元二年の臨洮軍への入寇から始まるが、そ
の原因は公主の入蔵前の兩國の二つの軍事的交渉に關連している。

第一は李知古の劔南方面経略であるが、通鑑景雲元年末を見ると
次のごとく記されている。

姚州羣蛮先附吐蕃、振監察御史李知古請發兵擊之、既降、又請築城



列置州郡重稅之、黃門侍郎徐堅以為不可、不從、知古發劍南兵築城、因欲誅其豪傑、掠子女為奴婢、羣蠻怨怒、蠻酋傍名引吐蕃攻知古殺之、以其尸祭天、由是姚弋路絕、連年不通。

旧伝にはこれより簡略な文を「睿宗即位」の後に掲げているが、新伝にはこの事件をB史料の後にほぼ同様の内容で記している。

虜殺知古、尸以祭天、進攻蜀漢、詔蓋武監軍右台御史唐九徵為姚弋道討擊使、率兵擊之、虜以鉄繩梁漢瀧二水、逼西洱蠻、築城戍之、九徵毀緬夷城、建鉄柱於瀧池、以勒功。

劍南方面の蠻族の向背は南詔の勢力の發展と關連があるのでここに詳しくは述べられないが、右の通鑑の文中「姚州諸蠻が先に吐蕃に付した」とあるのは、高宗の時代に姚州（雲南省姚安県）、瀧州（西康省西昌県）などの諸蠻族が唐吐蕃抗争の間に吐蕃に付いた事實を意味している。即ち姚安、西昌は西康省雅安より南下して雲南省昆明方面に至る道程にあり、吐蕃の雲南經營の重要ルートに沿っていた。通鑑乾封二年二月の条に、

生羌十二州為吐蕃所破。

とあり、この十二州には姚暹なども当然含まれていたと考えられるが、新伝永隆元年の条には、

初劍南茂州之西築安戎城、以迓其部、俄為生羌導、虜取之以守、因并西洱河諸蠻。

とあって、唐の劍南經營の大道が吐蕃に遮断されていたことを物語

っている。

西洱蠻は洱海のほとり大蠶、大和、羊苜咩などの地に拠っていたタイ系に属する所謂白蠻の一種で、当時白国又は白子国と言う王国を形成していた。漾濞二水は明かではないが現在洱海に注ぐ漾濞江の上流で西康省バタンより塩井、徳欽、維西を経て洱海方面に達する通路の上にあったものと考えられる。そこでこの場合唐九徵の役割は昆明方面への第一ルートを先ず抑え、ついで洱海方面に進んで吐蕃が漾濞二水にかけた鉄索橋を落し第二ルートを経略して帰ることであつたであろう。第一ルートは李知古によって先に経略されたが吐蕃の報復をうけて失敗し、唐九徵はこれを回復するとともに第二ルートの経略まで進んだのである。吐蕃がここで南下の勢力を一步後退せしめられたのは言うまでもない。ただこの経略の時期については旧伝には睿宗の即位後のこととし、新伝には先の考証のごとく長安三年にかけている。しかし新旧唐書中宗本紀の景龍元年六月戊子の条に、

姚弋道討擊使侍御史唐九徵擊姚州叛蠻破之、俘虜三千計、遂於其処勒石紀功焉（旧）。

吐蕃及姚州蠻寇邊、姚弋道討擊使唐九徵敗之（新）。

とあるのに基き、ここでは景龍元年（七〇七）の事實と認定しておきたい。

第二の軍事的交渉は張玄表の吐蕃攻撃であるが、これに關しては

旧伝に李知古の殺されたことを述べたのに続いて、

時張玄表為安西都護、又与吐蕃比境、互相攻掠、吐蕃内雖怨怒、
外敦和好。

とあり、通鑑にも李知古の死の後に、より簡単な文があつて戦鬪の
事實は明かであるが、その交戦の場所も実情も知ることはできない。
ただ通鑑の文は景雲元年(七一〇)末にかけており、旧伝の睿宗即
位後の事實としてゐるのは年代的には矛盾がない。この年のはじ
めには金城公主の入蔵があつたので、張玄表の攻撃はこの年より前
にあつたものと考えるのが妥当であろう。旧伝、通鑑の書きぶりか
ら見ると李知古の事件と殆ど時を同うしているようであるし、或は
南北相応して吐蕃に圧力をかける作戦が唐朝によつて遂行されたの
かも知れない。とすれば通鑑がこれを景雲元年にかけたのは実は河
西九曲を吐蕃に与えたことについてかけたのであつて、李知古、張
玄表の事件は吐蕃の河西九曲の要求の原因としてこれに簡単に付し
たものに過ぎなかつたことになる。

前述のごとく李知古の事件より唐九徵が劔南を侵略したのが景龍
元年(七〇七)のことであり、張玄表の攻撃がやはりその頃行われ
たとすると、J—O史料と比較対照して頗る興味深遠たるものを感じ
させられる。即ち七〇四年にチドゥソンが歿し、生れたばかりの
チデツクツェンが立つたが、七〇五年にはネパール、セリブ及び吐
蕃内部の叛乱が連発し、七〇六年には漸く安定の兆が見えて、七〇

七年にはツェンボと祖母は分離して行動するようになった。ついで
七〇九年にはセリブの王が擒えられて漸く吐蕃南方の秩序は回復さ
れた。七〇七年の唐の南北よりする攻撃は正にこのような吐蕃の最
悪の事態のときに行われたもので、従つて吐蕃の危機意識は相当深
刻なものであつたに相違ない。七一〇年の金城公主の降嫁について、
吐蕃はツェンボの祖母までが贈物を唐朝に献上して必死となつて急
いだ裏には、このような唐の政治的軍事的圧力が原因をなしていた
ことを見逃すことはできないのである。吐蕃は金城公主を迎えるこ
とによつて唐とは一応和平を保ち、一方その化粧料としては河西九
曲の地を獲得し、失われた勢力範囲は他日何等かの形で回復するこ
とを期したのであろう。旧伝などの言うごとく吐蕃は正に「内に怨
怒すと雖も外和好を致く」し、漸くこの重大危機を切り抜けたので
ある。

さて第一回の戦鬪の原因は、交戦の後吐蕃が唐朝に送つた書信に、
張玄表、李知古の將兵は甥(吐蕃のツェンボ自らを指す)の國
を侵略しました。故に私の方でも盟約に背いて戦つたのでありま
す。

とあり(後述)、右に述べた事實が遠因の一つであることは間違ひ
ないが、直接の動機は吐蕃から申入れた盟約が成立しなかつたこと
にある。この請盟は新伝と通鑑に記載があり、それによると開元二
年に吐蕃の相益達延が唐の宰相姚崇に書を送つて、解琬を遣わし河

源に境界を決定し盟約を結ぶことを請求したのに始る。解琬は曾って朔方大総管となり名声高く、吐蕃はこれを知っていたので彼を特に指名したのであるが、彼は既に金紫光祿大夫で致仕していた。

唐朝では又彼を左散騎常侍にして吐蕃に遣わし先方の要求に答えることに決定した。書を送った牟達延 **Man dat ian* については旧伝には益達焉 **Yian t'ei ian* とあり、K史料に大論チシグシャンニエンの協力者として現れるボンダギェルツェンスン *Hon da kyal tsan sun* であるのであろう。この際チベット語の *kyal* に対して延 *yan*、焉 *yan* などの音が当てられるのが少しく理解しがたいが、吐蕃の先祖の *Ho kke shu tsal* に鶻提密剌野が当てられ、*shu tsal* に対して弗夜が当てられる事例を見ると当時の *tsal* には事実 *tsal* のごとき音が存在したと考えるより他はない。

玄宗は姚崇に返書を書かせ解琬に神龍のときの誓約書を持たせて吐蕃に遣わしたが(旧伝開元二年の条)、琬の帰国してからの意見では、吐蕃は必ず陰に叛計を抱いているから十万人の兵を秦州(甘肅省天水県西六十里)、渭州(同省隴西県東南五里)などに駐屯させ、これに備えるべきであると言うのであった(新唐書卷一三〇、旧唐書卷一〇〇解琬伝、通鑑開元二年夏四月己酉の条)。同年の六月には(通鑑)、尚欽蔵 *Shan khri dzan* と御史の名悉臘 *Min shlop* ①) が吐蕃より到来して盟文を呈出したが(新伝)、兩人とも金城公主を迎

えたときに使者のシャンツェントレジンに従った人物であるとすれば、この際吐蕃の深い配慮の程が窺われるのである。果して解琬の警告したごとく八月にはボンダギェルとチシグ *chi shig* ②) は十万人の軍を率いて臨洮(甘肅省臨潭県西南七里)に寇し蘭州、渭源(甘肅省渭源県)などを攻撃し監馬を掠奪した。鄯州都督の楊矩はこれを見て間もなく自殺したが、それは賄賂を得て河西九曲を与えた責任を思えば蓋し当然の結果と言わなければならない。

七

とにかく唐朝では当時官爵を削除されていた薛訥を撰左羽林將軍隴右防禦使とし、右驍衛將軍の郭知運をこれに副とし、一方太僕少卿隴右羣牧使の王峻に兵を与えて吐蕃を攻撃させた(旧唐書卷九三新唐書卷一一一薛訥伝、通鑑)。玄宗は詔を下し兵十萬、馬四萬匹を率いて親征することを考えた(通鑑)。冬十月には吐蕃は再び渭源に寇し、薛訥はこれと武街馱(甘肅省渭源県の西)に戦って敵を大敗させた。この時王峻は部下二千人を率いてこれに参加し武街より二十里ばかり離れた大來谷に進出したボンダギェルの兵十萬と戦った。王峻は勇士七百人を選抜し胡服を着せて夜襲を行い、後軍に鼓角を鳴らさせて大軍の進撃するごとく見せかけた。敵は驚いて同志討を演じ多数の死傷者を出したが、王峻は又夜襲を繰返し敢行し、

吐蕃軍はこの攻撃に堪えかねて崩壊退却した(旧唐書卷九三、新唐書卷一一一王峻伝)。王峻はここではじめて薛訥の軍と合したが、旧唐書の文によると武衛と大来谷との中間に吐蕃軍がいたとあるから、王峻の作戦は敵の背後に廻り溪谷にそうてその大軍を挟撃したことになるのであろう。

合体後の唐軍は更に吐蕃軍を洮水まで追撃し、又長城堡で戦つてこれを破つた。秦の長城は臨洮に起つているから恐らく長城堡はその西端に位置した防塞として存在したのであろう。豊安軍使の王海賓は郎將の反乱で戦死したが、多分この反乱は唐軍の一部が吐蕃側に内応したものと考えられる。旧唐書本紀には王海賓を王峻の長子とするが、新旧唐書王峻伝ともにこのことは見えず、旧唐書薛訥伝には海賓の戦死は記するがやはり峻との父子関係は記していない。このような事件にも拘わらず唐軍の勢はますます強く、吐蕃軍は洮水を背後にして戦つたが大敗し、洮水は為に流れなかったと言われ程の犠牲者を出した(新伝)。通鑑はこの一連の戦闘で「前後殺獲数万」と記すが、新唐書本紀は武衛の戦のみでも「斬首一万七千級、馬七千七匹、牛羊四万頭」とあるから吐蕃の出した損害の数量は相当なものであったに相違ない。

唐ではこの戦闘の善後措置として紫微舍人の倪若水を遣わし、軍功を検べ戦歿將士の慰靈祭を行い、関係の州県には勅を下して吐蕃

軍の遺棄死体を埋葬せしめた。又虜懐慎、姚崇などの宰相の言に基き、吐蕃の黄河にかけた橋を落し、黄河を以て境界とする方針を定めたが(五八頁参照)、一方左驍衛郎將の尉遲瓌を吐蕃に遣わし金城公主を宣慰せしめた。恐らく唐より和平のジュヌスチユアを試みたものと思われるが、その影響であらう、吐蕃でも大臣の宗俄因子

(通鑑では因牙)を送つて洮水のほとりで戦死者の慰靈祭を執行し(新旧伝)かつ和平を願わせた。しかしその勢力の強大なのを憚んで対等の礼を要求し言辞は傲慢であつたから、玄宗はその態度に不滿を持ち、和平交渉をとりあげず、使者は臨洮よりそのまま帰国させた。そのみでなく唐ではこの年の十二月に隴右節度大使を置き、鄯、秦、河、渭、蘭、臨(甘肅省臨潭県西南七十里、臨潭故城)、武(同省武都県北三百十里)、洮、岷、郭、疊、宕十二州を領せしめ、隴右防禦副使の郭知運をこれに当てた。九年の春には彼は河西節度使をも兼ねて吐蕃に対して強力に備えたが冬十月には死して右衛副率の王君奐がこれに代つた(新唐書卷一三三王君奐伝)。兩人とも勇敢で騎射をよくし「王郭」と言われて高名であつたため異民族はこれを憚つたと言う(旧唐書一〇三、新唐書一三三郭知運伝)。

洮水の戦闘以後吐蕃の入寇は殆ど存在しなくなったが、ただ開元四年の二月に松州を囲み、松州都督の孫仁猷に破られた(新唐書本紀、通鑑)のと五年の秋七月に郭知運に河西九曲に敗られた(通鑑、

新唐書一三三郭知運伝。旧唐書一〇三同伝では六年のこととする。のが例外である。恐らくこれで吐蕃は唐の防備力を充分認識したのであろう。この後は戦鬪よりは和平の交渉が開始され、新唐書本紀によると四年の七月、五年の三月、七年の六月と連続して吐蕃は和平を提議している。そのうち六年より七年にかけての和平交渉はその過程におけるピークをなすものであるが、これらの接衝にはいずれも金城公主が或る程度関係している。

第一の開元四年の請和については冊府元龜卷九七九外臣部和親第二に次のごとくある。即ち、

「開元」四年八月、吐蕃は和を請うたので「朝廷は」これに従った。そして金城公主及びツェンポに錦帛器物などを賞賜され、蕃酋は皆それぞれ嘉賞せられた。

とあり、これに対して公主が謝恩の言葉述べて、^⑭

奴奴奉見舅甥平章書云、還依旧日、重為和好、既奉如此進止、奴奴還同再生下情、不勝喜躍。

と言っている。

第二に五年の交渉については、やはり同書同項に、開元五年三月、吐蕃のツェンポが遣使奉表して和を請うたことを言い、金城公主の上表を掲げている。^⑮

金城公主奴奴言、季夏極熱、伏惟皇帝兄御勝勝、奴奴甚平安、願皇帝兄勿憂、此間宰相向奴奴道、贊善甚欲得和好、亦疑親暑誓

文、往者皇帝兄下許親暑誓文、奴奴降蕃事緣和好、今乃振動、実將不安和、矜憐奴奴遠在他國、皇帝兄親暑誓文亦嘗事、即得兩國久長安隱、伏惟念之。

これによって見ると公主はチベット側の意向を伝えて、兩國が会盟を行い天子がその約文に親署することを願っているのである。新伝には宗俄因子の請和の後に、

金城公主上書、求聽僑好、且言贊善君臣欲与天子共暑誓刻、又遣使者上書。

と言い、その間の事情をまとめて記しており、ついでその上書の内容を述べている。その叙述は二段に分けられ重要な事実を記しているが、チベット文より直訳したためか甚だ巧ならざる文章となっている。

孝和皇帝（Ⅱ中宗）は曾て盟約を許されました。その時唐の宰相の豆盧欽望、魏元忠、李嶠、紀処訥たち凡そ二十二人と吐蕃の君臣はともに誓約致しました。孝和皇帝が亡られ太上皇（Ⅰ睿宗）が位を嗣がれても親好はもとのように続けられました。しかし唐の宰相で盟約に署名したものは皆亡りました。「従って」今の宰相は前の誓約には関係ないのでから「ここに」再び盟約して戴きたいと思えます。近頃論乞力たちを前後して七回ほど使節として派遣しましたが未だ許可を与えられません。それに張玄表、李知古の將兵は甥（ツェンポ自らを言う）の國を侵略しました。故に私の方でも盟約に背いて戦ったのであります。今舅上（Ⅱ唐皇

帝)は従來の良からざる關係を棄てて平和な状態に復歸することを許され甥の私も「それについては」既に堅く決意しておりますところが盟約を重ねて行わないため未だ信をおくことができません。要は新しい盟約「の締結」を待つのみであります。甥は自ら國の政務を統べ、下のものには牽制されないで一般人民を永く安隱にしようと考えております。舅上が和平のことを思われても氣持がそれに集中されていないならば、たとい言葉の上でそれを言っても何の利益がありません。

舅上は乞力徐が軍を集結したことを責められました。「これは」ちょうど新旧の軍隊を交代させたのでありまして集結したわけではありません。昔は国境は白水(位置については後述)より向うは皆放置された土地でありました。「ところが」近頃郭(知運)將軍は兵を屯して城塞を築きました。そこで甥(の方で)もまた城塞を築いたのであります。「それで」たとい二國が媾和して「使者を」送迎するようになって、もしそれが通じないときには國境を守備するだけに止めましょう。又突厥の骨咄祿と親しいのを疑っていられますが「唐と吐蕃とは」古く親善の使者を交換し互に舅甥と呼びあつていたのでありますから、その關係が初めの通りになれば「突厥とは」交わらないであります。

中宗時代の盟約は神龍二年に行われたが^①史上には明記がない。冊府元龜卷九八一外臣部盟誓、開元六年十一月の条にはこの上書が一層詳しく出ているが要点は右の新伝の文に尽くされている。

さてこれに対し、玄宗は「昔既に和親して盟約が存在しているの

であるからこれを調べたらよい」と言つて、盟約の件は許可しなかつた。しかし使者は丁寧な待遇して送り歸し、ツェンポには多くの贈物を賜つた(新伝)。吐蕃は「これより年ごとに朝貢し辺境を犯さなくなつた」と新伝には交渉の結果を述べているが、この最後の交渉が何年にあつたかは正確には新伝には記すところがない。ただ通鑑開元六年冬十一月戊辰の条に、

吐蕃奉表請和、乞舅甥親署誓文、又令彼此宰相、皆著名于其上。とあり、続いて七年六月戊辰の条に、

吐蕃復遣使請上親署誓文、上不許曰、昔歲誓約已定、苟信不由衷、亟誓何益。

とあるのに従うより他はないであらう。

盟約は成立しなかつたが、新伝の言うごとくこれより後暫く兩國の間に戦争状態はなくなつたので交渉の成果は事実上あつたものと見てよい。もし金城公主の運動がその好結果の一つの原因であつたとすれば、公主は兩國の和平の成立に功績を立てたことにならう。公主の化粧料から起つた激烈な戦闘ではあつたがその終結に自らの力が働き責任の幾分を果したとすれば、彼女の心には些か以て慰むべきものがあつたに相違ない。

第二回の戦闘は開元十四年冬の悉諾邏の大斗谷侵入からであるが、その前にパミール方面の状勢を一応考えておこう。

開元十年に吐蕃はパミール高原中の小勃律国を攻撃したが、その王没謹忙は北廷節度使の張孝嵩に書を送って急速な援助を請求した。小勃律国がパミールのギルギット方面で、大勃律国がその東のバルチスタン方面であることはシャヴァンヌ以来の定説であって、今これを批判する必要はない。当時吐蕃は既に西チベットの羊同国や東女国 *Samarqanda* などを征服して次にはその勢力は当然勃律方面に波及すべき筈であった。後述のごとく郭元振の論欽陵 *Prakriti* *Prakriti* に対する言葉によれば、吐蕃の西トルキスタン方面への活動は確にパミール方面を通じていたとしか考えられないし、新唐書卷三二一下勃律伝によれば、時期は明確でないが、早くから勃律は吐蕃に役属していたのであった。とすれば何故に開元十年に至って吐蕃と小勃律との間に紛争が起ったか。その原因を確めるために開元初期のトルキスタンにおける吐蕃の活動状況を一応調べる必要がある。

通鑑開元三年十一月の条には、

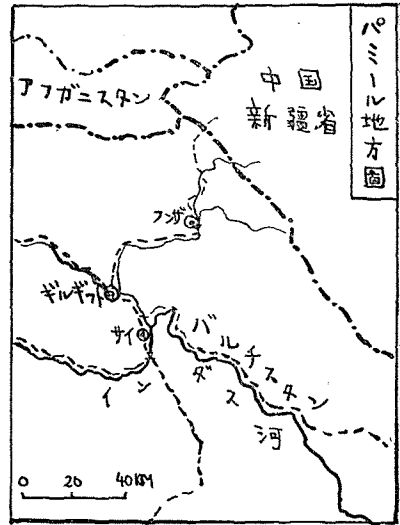
初監察御史張孝嵩奉使鄯州、還陳嶺西利害、請往察其形勢、上許之、聽以便宣從事、拔汗那者古烏孫也、内附歲久、吐蕃与大食共立阿

了達為主、發兵攻之、拔汗那王兵敗、奔安西求救、孝嵩謂都護呂休璟、不救敗、無以号令西域、遂帥旁側落兵万余人、出龜茲西數千里、下數百城、長驅而進、是月攻阿了達于連城、孝嵩自環甲督士卒急攻、自己(二前十時)至西(二後六時)屠其三城、俘斬千余級、阿了達遣与救騎逃入山谷。

とあり、吐蕃が大食と連合してフェルガナ経営を行おうとしたことが見える。吐蕃が吐谷渾を撃破したとき既に吐蕃は鄯善をその勢力範圍としコータンなどにも若干の勢力を及ぼしていた。しかしここには安西四鎮の一があつて長寿二年(六九三)の王孝傑の四鎮回復後吐蕃の手に陥ちたと言う事實はない。従つて吐蕃が南道方面から西トルキスタンに工作したと言うことはこの際到底考えられない。ところが新伝によると則天武后の時代に吐蕃の論欽陵が西突厥十姓のうち弩失畢五部(ほぼトクマツク以西の地域)を求めた際に郭元振に次のごとく言っている。

十姓五咄陸(西突厥の東方五部、ほぼトクマツク以東の地域)近安西、於吐蕃遠、俟斤(二弩失畢)距我載一磧、騎士勝突、不易旬至、是以為憂也。

これによると弩失畢方面は吐蕃にとつて頗る密接な利害關係にあつたことが暗示されるが、このことから我我は吐蕃は西チベットを通じて西トルキスタンへ働きかけたことを疑わざるを得ない。そこで当面の問題の勃律国であるが、慧超往五天竺国伝^⑧には次のような記載がある。



又迦葉弥羅國東北、隔山十五日程、即是大勃律國、楊同國、娑播慈國、此三国並屬吐蕃所管。

又迦葉弥羅國西北、隔山七日程、在小勃律國、此屬漢國所管。

ここに大小勃律が所管を異にしていることに注意せねばならぬ。慧超は開元十五年十一月に求法行を終えて安西に帰っているが、実は小勃律は開元の初にその王が唐に入朝しているのである。新唐書卷二二一下勃律伝には、

開元初、王没謹忙來朝、玄宗以児子畜之、以其地為綏遠軍、因迫吐蕃、數為所困、吐蕃曰、我非謀爾國、假道攻四鎮爾、久之吐蕃奪其九城、没謹忙求救北廷、節度使張孝嵩遣疏勒副使張思礼、率銳兵四千、倍道往、没謹忙因出兵、大破吐蕃、殺其衆數萬、復九

城、詔冊為小勃律王、遣大首領蔡卓那斯摩没勝入謝。

とあるが、没謹忙が安西に援兵を求めたのは開元十年のことであるから、右の記事により没謹忙の入朝及び綏遠軍の設置はそれ以前開元元年までの間であることが明かである。大勃律と小勃律との關係は慧超伝によれば、

其大勃律元是小勃律王所住之處、為吐蕃來逼、走入小勃律國坐、首領百姓在大勃律不來。

とあり、小勃律は大勃律より西遷して成立した国であることが分る。その時期については知り得ないが、しかしこれによって大勃律は初めて王を失い吐蕃に役属したのではない。即ち新唐書勃律伝を見る

大勃律或曰布露、直吐蕃西、与小勃律接、西隣北天竺烏菴、地宜鬱金、役属吐蕃、万歲通天速開元時三遣使者朝、故冊其君蘇弗舍利支離泥為王、死、又冊蘇麟陀逸之嗣、王凡再遣大首領貢方物。

とあって、かなり古くから吐蕃に役属していたらしくあり、王も次々と冊立されていた。右の記事により万歲通天(六九六)、以前に役属せられていたとすると、遡つて羊同の役属まで、その間にのみ我々は勃律の吐蕃への服属があったと推測し得るのである。従つて万歲通天以前の吐蕃の西突厥弩失畢方面への工作にもこの西チベットよりするルートが使われていたことは一応考えに入れておかなければならないのである。

ところで大勃律、小勃律のそれぞれの位置を比較するとこのパミール溪谷の中での四通八達の要衝は小勃律―ギルギットであつて、大勃律―バルチスタンの方面ではない。吐蕃はバルチスタンの方面より如何にして大軍を中央アジアに動かすことを得たか。この問題は頗る難問のごとく見える。しかし我我は勃律が元来一つであつて大小の区別がなかつたことをよく考慮する必要がある。バルチスタンの方面より没謹忙又はその先代が西遷するまでは勃律の中心は確にバルチスタンの地方であつた。当時既に勃律は全体として吐蕃に役属していたから吐蕃の軍隊は問題なくギルギット方面を通過して中央アジアへ出入していただであらう。しかし恐らく没謹忙又は先代の王は吐蕃と隙を生じてギルギット方面へと退避した。ギルギットとバルチスタンとの間には深溪に藤橋がかかり、これを切断しさえすれば簡単に両地方の連絡は断ち切ることができた。又吐蕃の勢力さえ及ばなければ西方の諸国の使者や商胡の往来も盛であつたに相違ない。ここに小勃律「国」の成立する所以があつたわけである。玄宗は没謹忙を兒子として養つたというのが小国の王子に対する憐愍の情ばかりでなく政策的な配慮が潜んでいたことはあり得ることである。開元の初めより三年にかけて吐蕃のフェルガナ経略があつたとき、又開元五年の四鎮攻撃の計画があつたときに没謹忙は唐朝にいたであらう。しかし間もなくギルギットへ帰つて綏遠軍を成つて

反蕃親唐的な色彩を明かにした。ために吐蕃はこれを黙視することができなくなり、開元十年の小勃律攻撃を開始したのであらう。而して疏勒副使張思礼等の援軍が到着したため吐蕃は惨敗を喫して退却した。吐蕃は前に小勃律王に「我我は爾の国を謀らうとするのでなく道を借りて安西四鎮を攻撃するだけだ」と言つていたが今この要衝を完全に確保しそこねたのである。通鑑のこの事件を記した箇所には最後に付言して、

自是累歲、吐蕃不犯辺。

とあるが、事実それより暫くの間鬻失畢方面への吐蕃の進出は文獻の上には現れていない。

ただこれより五年後開元十五年に突騎施の蘇祿が吐蕃と結んで安西を攻撃した例が一つある。蘇祿は当時西突厥の覇者であつたが、開元七年九月に唐より忠順可汗の号を進められ（通鑑）、その後二年を経て使者を遣し納贖して阿史那懷道の女交河公主を与えられた（新唐書二一五下突厥伝下突騎施蘇祿の条）。後突騎施は馬を安西に市しようとして公主の教を都護の村邏に送つたが、村邏は、

阿史那女敢宣教邪。

と言つてその使を答つて報ぜず（前掲書）、ために馬は寒雪に遭つて殆ど斃死した（旧唐書列伝一四四下突厥伝下蘇祿の条）。蘇祿はこの事件の始終を聞いて頗る怒り吐蕃と連合して安西を囲んだ。通鑑

にはこれについて、

閏(九)月庚子、吐蕃贊普与突騎施蘇祿围安西城、安西副大都護
趙頤貞擊退之。

とあるが、この文は多少誇張した点があるのではないかと思う。新
唐書突厥伝下には、

趙頤貞代^{貞?}(杜暹)為都護、乘城久之、出戰又敗、蘇祿略人畜、発
困貯、徐開運已宰相、乃引去。

とあり、旧唐書突厥伝下には、
趙頤貞代為安西都護、城守久之、由是四鎮貯積及人畜並為蘇祿所
掠、安西僅全。

とあって全く戦局は蘇祿にイニシアティブを取られていたことを示
している。「吐蕃贊普云云」の記事は新唐書突厥伝下には「蘇祿」
陰結吐蕃」とある程度で旧唐書には吐蕃の名さえ見えない。従って
吐蕃のツェンポが自ら安西まで大軍を率いて出撃したなどというこ
とは到底この際考えられないのである。 [未完]

註① 吐蕃年代記の牛の年(七一三、開元元年)の条に(D.H. P.
21)シナの使者ヤンケン Yeh Kien は「ツェンポに」敬意を表せ
り。

とあるが、或はヤンケンが楊矩を指しているのかも知れない。
Kien は恐らく敬称の卿 King であろう。

② 水経注のテキストは戴震の校本を用いる。

③ 尤も吐蕃は前年の開元元年にも使者を遣わして和を請うてい
る。冊府元龜卷九八〇外臣部通好、開元元年十二月の条にそれ
が見えるが、通鑑はこれを十二月甲午にかけている。

④ 唐会要卷九七吐蕃、開元二年の条には「益達延陀」と出てく
るが誤であろう。

⑤ Pelliot, P., *Quelques transcriptions chinoises de noms tibétains*,
TP, 1915, p. 11.

⑥ Ibid., p. 12.

⑦ 神龍のときに盟約が行われたことは開元六―七年にツェンポ
が送った書信の中にも相当具体的に記されており(六六頁参照)、
事実として誤りない。冊府元龜卷九八一外臣部盟誓、開元二年
の条には、「解瓊は神龍二年の吐蕃の誓文を持参した」とする。
神龍二年の唐蕃の盟約はこれを除いて他の史書には全く見えな
い。

⑧ 尚欽蔵、名悉臘の名については本論文(上)の七七頁及び註
⑩参照。

⑨ この侵入のときの吐蕃の將は新伝によれば益達延のみである
が、旧伝、通鑑には彼の名とともに乞力徐の名を記している。
冊府元龜卷九七四外臣部褒異、開元七年六月戊辰の条及び同書
卷九八〇外臣部通好の同年の条を見ると、吐蕃の使者を黜応し
たとき朝廷よりツェンポ以下への賜物があつたが、それについ
て、

賜益達延「雜綵」一百三十段、賜論乞力徐一百段。

とある。従つて乞力徐は論乞力徐を正しいとすべきであろう。

論乞力徐 *Iron k'iat lak z'io* であれば *Blon khri gziis* と還元できる。当時吐蕃の大論にはバーのチシグシャーンニヤン *Diabs khri gziis shan nan* があり、しばしばチシグ *khri gziis* と略称された (K P 史料参照) が、贈物の差から見てこれを同一人物とすることはできない。何となればチベット文獻ではチシグは明かにボンダゲニルより上位となるからである。

⑩ 新旧伝、両本紀、旧唐書卷九三、新唐書卷一一一薛訥伝ともこの地名を武階とし旧伝では「渭源之武階駅」と記しているが、ここでは武街としておく。既に水経注に地理志を引いて、狄道東有白石山、澗水又西北、逕武街城南。

とあり武街の名が見える。狄道は臨洮県の西南にあり、澗水に注ぐ隴水を指す。晋代にもこの地名は武街であったし通鑑の唐紀にも武街と記すのでこれに従いたい。

⑪ 新伝には「斬首万七千、獲馬無慮二十万」とある。

⑫ 通鑑によれば開元八年の十一月に突厥が甘州、涼州などに入寇したときこれを防いで失敗したのは河西節度使の楊敬述であった。このために楊敬述は九年の春正月に官爵を削られ檢校涼州都督にされ諸使に充てられた。而して同年冬の条には河西隴右節度大使郭知運の卒を伝え、王君奭が代って河西隴右節度使となり涼州都督を判じたと言うから河西節度使を郭知運が兼ねたのは楊敬述の失脚以後と見たい。即ち九年春正月から四年の冬十月までの短い期間が郭知運の任期であったのである。

⑬ 全唐文卷一〇〇には「謝恩賜錦帛器物表」として収録されてる。

⑭ 前掲書に「乞許贊普請和表」として収録されてる。

⑮ *Chavannes, Et., Documents sur Touk-tine (Tures) occidentaux. St-Petersbourg, 1903. p. 149, fn. 3. p. 140, fn. 1.*

⑯ 羽田亨「慧超往五天竺国伝後録」京都大学文学部史学科編、紀元二千六百年記念論文集四三五一―六頁。

⑰ 慧超の伝記に関しては高楠順次郎「慧超往五天竺国伝に就て」(宗教界第十一卷七号)参照。

⑱ 羽田亨前掲書四三六頁。

⑲ 冊府元龜卷九六四外臣部封冊二を見ると、開元八年、遣使冊勃律國王蘇麟陀逸之為勃律王。

とある。シャヴァンヌはこの王の名を *Surendraditya* ではないかと疑っている (*Chavannes, Ind. p. 150*)

⑳ 天宝六載に高仙芝が勃律遠征を行ったときに、娑夷川にかか藤橋を落して吐蕃の進出を遮断したことがある (旧唐書卷一〇四高仙芝伝、新唐書卷一三五同伝)。

㉑ 新唐書勃律伝に没謹忙より三代後の蘇失利之のとき、為吐蕃陰誘妻以女、故西北二十余国皆臣吐蕃。

であったと記されている。

㉒ 新唐書勃律伝には「開元の初めに王没謹忙が来朝した」とあるが没謹忙はこの時王子であったのではないかと疑われる。註

⑳ によれば開元八年に立った王が蘇麟陀逸之でありその前に没謹忙なる王が在位した記録はないからである。

〔略語表〕 新伝 新唐書列伝一四一上吐蕃伝上
旧伝 旧唐書列伝一四六上吐蕃伝上